

平成 21 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名：グループホーム ぶどう苑 (ユニット1)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372300327		
法人名	特定非営利活動法人ともにあゆむ会		
事業所名	グループホーム ぶどう苑		
所在地	〒028-3203 岩手県花巻市大迫町大迫1-4-55		
自己評価作成日	平成 21年 11月 1日	評価結果市町村受理日	平成 22年 2月 26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0372300327&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 21年 11月 30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

各委員会を設置しており(食事検討委員会、レク委員会)、月に一度の会議にて、色々とアイデアを出し合い、様々なイベントを実施している。昨年から始めたBBフェスティバルでは、演奏会、職員の出し物、カラオケ大会、出店を出したりなど、地域の方々にも浸透してきて、楽しんでいただいている。その他にも、各教室(習字教室、陶芸教室、カラオケ教室)、季節に合ったイベント(流しそうめん、すいか割り、芋煮会)、地域の園児との交流等、利用者様に楽しんで頂いているイベントを行っている、自負している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは1階と2階の2ユニットで、小規模多機能事業所も併設されている。毎年夏に開催しているBBフェスティバルでは、今年300人の来場者があり、近隣地域と一体となつてのイベント運営は小規模な事業所としては素晴らしい。様々な面においてユニット間の協力や、小規模多機能からのバックアップを得られるほか、夜間は併設事業所も含めて3人の勤務者がおり安心につながっている。また近隣住民が先生となつての書道教室、陶芸教室、手踊り教室も実施しており利用者の楽しみとなっている。地域全体に事業所をアピールしていくことを課題としており、今後より広い範囲での事業所理解が深まることが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム ぶどう苑 (ユニット1)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「私たちは利用者様の気持ちに寄り添って、生活を共にします」を理念として、住み慣れた地域での一人ひとりの生活の支援に繋がられるようにスタッフ会議等で話し合い、実践している。	利用者の気持ちをどう理解するかという点から、全職員で「利用者の立場だったら」として意見を出し合った。「話をきいてほしい」「お風呂に毎日入りたい」「一人になりたい」などの意見がだされ、職員の意識も高まっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地区のお祭りには、製作時より職員と利用者が参加し、保育園や小中学校との交流も積極的に行っている。地区の方を招いての教室等にも参加し、交流を深めている。	以前から地域活動に熱心な職員もいるため、近隣地域の行事には参加しやすい。毎年実施しているBBフェスティバルは、今年度300人の参加があり地域住民にとっても楽しみな行事となっている。	地域における事業所の理解は徐々に進んでいるが、まだ十分に知られていないとの印象もある。今後、地域全体に事業所をアピールしていく場面や方法を模索していくことが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	家族介護教室を開き、地域の方々に多く参加して頂けるよう、チラシやポスター等で呼びかけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的に会議を開催しながらも、事業所の行事と運営推進会議を同時に開催し、苑の活動を直接見ていただく機会を取り入れたりしている。	民生委員や地域包括支援センター、老人クラブ代表、近隣住民、家族が参加者となって開催されている。事業所の様々な活動を伝える中で、参加者の理解も深まっている。	事業所の活動内容だけでなく、参加者が感じる地域課題や関心事から話題を発展させると、事業所の地域における役割を見出しやすい。話題の工夫を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	担当者と連絡を取り合ったり、地域ケア会議に出席し連絡を取り合っている。	新型インフルエンザ対策では行政から様々な情報提供を受けている。また生活保護を受けている利用者もいるため、担当職員とは日常的にやりとりがあり、話しやすい関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルを理解し、職員は身体拘束を行わないケアを実践している。居室は昼夜施錠をせず、玄関は日中鍵を掛けず、その都度声掛け・見守りをし、安全に心掛けている。	日中玄関を施錠しないことに伴って、利用者が一人で外に出たときを想定し、地図で職員の搜索担当地区を分担するなどの対応が検討されている。また近隣住民からの連絡がある場合もあり、事業所の助けとなっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法について学び、発生防止に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は日常生活自立支援事業や、成年後見制度について学び、活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者、家族に十分な説明を行い、理解と納得をしていただけるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には担当が決まっており、それとなく声を掛け、聴くようにし、家族の訪問時は意見や要望を聞き、必要があれば会議にかけ対応している。	各居室担当職員が中心になって利用者本人の願いや家族の要望を把握するようにしている。事業所では家族からより率直に意見を出してもらえればとの思いもある。	職員状況や外部評価結果の紹介、説明など、家族への情報提供をよりきめ細かにすることで関心を高めるなど、率直なコミュニケーションの基盤を築いていくことが今後期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の主任会議と各ユニットの会議で職員から自由に意見が出せるよう議題にも工夫を凝らしている。	2つのユニットそれぞれで様々な検討をしながら、他ユニットのいいアイデアは取り入れるようにしている。また小規模多機能も含めての食事委員会とレク委員会は、法人活動を検討していく中核として機能している。	地域から多くの参加を得ている行事実施は、委員会活動での職員意見が基点となっており意欲的である。今後も職員の主体性を大事にする姿勢を継続してもらいたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は朝のミーティング後、各ユニットを回りながら、利用者に声掛けするとともに、職員ともコミュニケーションを図っている。冗談を交えながらも日頃考えている事を引き出すようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	働きながら資格を取ろうとしている職員には勤務シフトで考慮している。研修や勉強会に参加させ、復命を回覧した他に、スタッフ会議で発表の機会をつくっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他法人との交換研修に参加したり、祭り等の招待を受け、利用者と一緒に出かける機会を利用して、他事業所との交流を図ったり、ネットワーク作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前調査を行う際、家族からだけでなく、本人からも困っている事、不安な事等、耳を傾けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス開始前、開始後も何度も家族と連絡を取り、困っている事等に耳を傾け、関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームの相談は入所に関してが多いため、居室に空きがない場合は他のサービスを薦めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	毎日の食事の準備や片付け、農作業など、時には職員が利用者に教わりながら、お互いを尊重しあう関係を目指し、実践している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が来苑された時には、談笑の時間を設けている。利用者と家族の時間、絆を大切にしながら、支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者が希望した時は電話などの支援を行っている他、大きなイベントを行う際は多くのご家族にも参加していただけるよう促している。	行事の際にはカラオケグループや中学校のブラスバンドなどを招いており、近隣団体と親しめる場面となっている。また利用者が以前住んでいた地区を訪問して、昔の知り合いが集まることもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	孤立している利用者には、職員が間に入り、支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院など、サービス利用が終了しても、職員でお見舞いに行ったり、家族に電話連絡をするなど関わりを持っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々一緒に暮らしていく中で、利用者の好きなこと、嫌いなこと、得意、不得意を見極め、毎日の暮らしに結びつける努力をしている。	多くのレク活動を行っているなか、そのような活動を好まない人には掃除を依頼する等している。利用者が何を好むかは、様々な活動における利用者の表情で、どのような場面で笑顔が見られるかに注目し推し量っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所申し込みの際、家族やケアマネジャー・ケースワーカーなどより生活の様子を聞き、これまでの暮らしの情報を収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	仕事好きの方もいれば、じっとしているのが好きな方もいるので、声掛けをし、その日その日の心身状態に応じている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者に生き生きと生活して頂く為に、生活歴、趣味等を知り、個々の介護計画に反映させ、支援している。	利用者の能力の維持や日々の集団生活における役割、精神的不安などに配慮してケアプランを検討している。家族からケアプランについて要望が出されることは少ないが、もっと歩かせてほしいなどの要望が出されている。	利用者個々の状態に応じて機能訓練を行っているが、要望のある家族にはより丁寧な説明や経過報告を行うことで家族の理解を促進するものと考えられる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日個別記録に記入し、注意点や気付いた事等は、特記事項に記入している。更に、利用者専用ノートを作り、職員間で情報を共有しながら介護の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族のニーズを把握し、話し合いながら、柔軟な支援に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアグループの訪問、地域の方を講師に招いての習字教室等を楽しみながら参加できるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所された時点で、家族が希望されれば、それまでの係り付け医との関係を継続できる支援をしている。事業所での様子を情報提供書、或いは職員の同行により説明している。	利用者の大半が従来までのかかりつけ医を受診しており、看護職員が同行することもある。また事業所での様子を伝えるものとして、居室担当職員が情報提供書を作成している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員と管理者・職員が連絡を取り合うことで、利用者の状態を把握できるようにし、受診の際などに、適切な看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した場合、安心して過ごせるよう、職員が見舞いに出掛けたり、家族と情報交換をしている。看護師が病院関係者からも利用者の状態を聴いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、終末期においては、家族にも取り組んでいく方向であることは話している。職員もスタッフ会議において話し合いをしている。	これまで検討対象となる利用者はなく、今後要望があればできるだけ対応していきたいとしている。しかし協力医療機関の状況を考慮すると、緊急時の往診など現状では難しい面もある。	利用者や家族から要望が出てくることに備えるためにも、終末期対応が可能な医療機関との協力関係づくりが今後期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	初期対応についてはマニュアルで共有している。救命救急の講習を受け、スタッフの間でもAEDを利用するなどして勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力により、避難訓練を実施し、月1回各ユニットでも訓練を行っている。	利用者も参加して年2回訓練を実施し、避難時の車イスでの移動スピードの加減や、防火扉の閉じ方などについて学んでいる。またユニットごとの訓練では心肺蘇生法などを練習している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに合わせた声掛けをし、トイレ誘導はさり気なく、オムツ等の取替えも自室で行うなどの配慮をしている。記録等も他者の目に触れないよう気を付けている。	職員間の会話では他の利用者のいる前でプライバシーに関わる話題を避けたり、部屋の戸を開けっ放しにしないよう配慮している。また他の利用者の記録類などを気に掛ける利用者はいないが、管理には気を配っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	畑仕事の好きな方、本を読む事が得意な方など、利用者一人ひとりに合わせて支援している。習字、陶芸、教室等も声掛けをし、利用者に参加を決めてもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩、レクについて、本人の希望を聞き、参加したくない利用者には強制しない。入浴日であっても入りたくない気分の日には無理には勧めない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類は利用者が決められる方は自分で着たい物を身につけている。町内のお店での好みの衣服の購入の支援をしているが、家族が届けてくださる方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	行事食や旬のものを取り入れた料理など工夫している。利用者と職員はいつも一緒に食事を取り、準備、後片付けをしている。	畑では大根や小松菜、さやいんげん等を栽培しており、食卓に並ぶと喜ばれる。また芋煮会やスイカ割りなど屋外での食事も行っている。外食はインフルエンザに配慮して控えているが、代わりに出前をとることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者により食べる量を調節し、体調管理に気をつけている。入浴後には水分補給を行い、利用者によっては定時の水分補給の他に声掛けをしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自力で歯磨きができる利用者を除き、「歯磨きしましょう」と声掛けをし、洗面所へ誘導し、口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりに合わせた声掛けをし、定時のトイレ誘導を行っている。排泄のシグナルがある場合、随時トイレ誘導をし、介助している。	オムツを使用している人もいるが、基本的にはトイレに誘導しての排泄支援を行っている。また定期的な排泄を促すために体操を実施している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘薬を利用している利用者が数名おり、その他に水分補給や体操、散歩を促すなど、予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	曜日ごとに入浴者を決めているが、拒否が見られた場合は、時間を置き、声掛けを行う。それでも拒否がある場合は、本人の意思を尊重した対応を行う。	利用者の意向に沿いながらではあるが、概ね1日おきに入浴している。拒否が続くときには「明日病院を受診するから入りましょう」など、誘い方を工夫している。さらに季節に応じて菖蒲湯やゆず湯を実施している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個室であるため、休息、睡眠は取れていると思う。ホールにて居眠りしている利用者には、その時々状況に応じて声掛けを行い、気持ちよく眠れるよう居室に誘導するなどしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は利用者一人ひとりが使用している薬について理解している。服薬しやすいように支援し、症状の変化の確認に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	誕生会でのケーキ作りや季節ごとの団子作り、月1回ずつ行われている教室も多彩にあり、興味のあるものに参加できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は散歩やドライブ、買い物などに出掛けられるよう努めている。家族や他ユニットの職員の協力により、遠くまで外出するイベントも行っている。	付近には白鳥が飛来する河川敷や桜並木があり、散歩にでる利用者も多い。また日曜には全員で出かける機会を設け、地域の美術館やワイナリーに出かけたりしている。	周辺環境に恵まれており、散歩時の清々しさは大きなものがある。また個別の外出要望にも応えており、高校野球の試合観戦に行ったこともある。今後も利用者の喜びを支え続けてもらいたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は利用者によって所持されている方もいるが、大抵の利用者は必要なものがある時は施設の一時立替金にて購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を希望される利用者に対しては勿論のこと、外部の方、家族とのつながりを絶やすことのないよう支援している。また、手作りによる年賀状などで身近な方に近況を伝えている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下には季節の行事の際のスナップ写真を貼り、その写真を見ながら思い出させるよう話しかけている。ホールには季節を感じられるものでの飾り付けを行っている。	2階ユニットの利用者は部屋で過ごす人が多いが、1階ユニットはリビングで過ごす人が多い。どちらのリビングからもぶどう畑の並ぶ緩やかな山並みが見れる他、屋外にはカラフルな電飾も設置され、夜間の彩りとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の居場所は色々あり、ホール以外にも畳の空間もあり、居室に入らずそこで横になっている利用者もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	日頃から使い慣れた時計や手鏡などの日用品を入居の際持ち込んでいただいている。その他、家族の写真や人形など、身近なものを持ち込み、思い思いに飾っていただいている。	お気に入りのぬいぐるみや様々な行事の写真のほか、家族からのメッセージや自分が生まれたころの新聞など、多くの思い出につながる品々が飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ、浴室、居室などは利用者が分かりやすいよう、マークや文字を見やすい位置に配置して、自立した生活が送れるよう支援している。		